

応援、母ちゃん！

—子育てしながら働く母親たち—

初めての推しは我が子、推し活について考える

14

たまむら ふみ

玉村 文



はじめにー好きになる力ー

集中力が続かず好きなものがコロコロ変わる、飽きっぽい性格の子どもでした。スイミングなど習い事は長く続けていましたが、好きで続けていたというよりは習慣で続けていて、思春期になり1回休んだことでその習慣が終わり辞めてしまったという経験の持ち主です。その頃になると、周りの女友達はジャニーズに夢中で、いわゆる「推し活」をして握手会に行く、グッズを買う、テレビ番組への出演などが話題になっていました。私はというと、ドラマが好き、漫画が好きなどコンテンツには惹かれていましたが、特定の誰かを対象に推し活をするということにはなかったと記憶しています。その頃から20代まで、誰か特定の人に対して「推し」のように強く思い入れることはありませんでした。人を好きになることは、才能でもあり能力でもあると思っていたので、夢中になれる他者がいる人のことを羨ましくも感じていましたし、そんな周囲と比較してわたしは好きになる力が弱いのではないかと残念に感じたこともありました。

1. 初めての推しは我が子

そんなわたしが、子どもがほしいと願い、妊娠、出産を経験し、我が子との出会いが強烈な感情体験となります。初めての推しは我が子でした、と言えるほど。誰がどのように評価しようと、我が子がかわいいという感情は揺るがないという強い確信を抱きました。広告に使われるようなビジュアルの子どもでなくても、お世話が大変で疲れが溜まって自分のしんどさに目が向くことが

あっても、成長して口が達者になった子どもに言い返されてムツとすることがあっても、それでも心の奥深くの我が子への愛情は揺るがないという確信があります。心の底から、応援し続ける存在が我が子であると感じています。推しがいる人の気持ちってこんな感じなのかなと想像できるようになったと思います。

2. 我が子以外に推す存在

下の子を出産したのがコロナ禍で、緊急事態宣言が出る時期もあり、なかなか外に出て交流する機会がもてない時期のことでした。必然的に家にいる時間が長くなりました。とはいえ、上のきょうだいもいるので保育園の送迎や在宅勤務をしていた夫への食事づくり、家事があり、赤ちゃんと密室で孤独な時間を過ごしていたわけではありませんでした。家族と長い時間を過ごすことができた期間ではありましたが、家族以外との交流も望んでいました。そんななか、オンラインでつながったママ友グループとのプロジェクトに参加していました。もう一つこの期間に夢中になったものがあります。それは、youtubeにあがっていたボーイズグループのオーディション番組、「the first」でした。オーディションって偉い人が若い子たちを一方向的に評価して、競わせて、蹴落として、それを消費するイメージが過去のテレビ番組の影響でありましたが、そうではありませんでした。主催者が順位をつけ、選ぶという行為はあるのですが、相互にリスペクトできる環境を作り、自分のスキルや能力を伸ばすことに集中できる、参加者を大事にしたものでした。わたしが見たく

ない誰かを蹴落としたり、無理に競わせて疲弊させるという過去のオーディションとは違う、それどころか良い環境を作ると参加者たちが見違えるほど伸びていく、成長していく、蛹から蝶に変態していく様子を見て、感動してしまいました。それ以来、そのオーディションに参加されていたダンスボーカルを志す若者たち、デビューグループ活動をしているもっと大人の方々を含めて夢中になっていきました。深く知っていくと、クリエイティブにかかわっているメンバーもいて楽曲制作でメッセージを発信したり、高いクオリティを突き詰めたり、グループメンバーに序列がなく全員が主役になれるような構成や歴史をもっていること、それらの要素すべてがわたしにとって心惹かれるものでした。

気づけば、無料のコンテンツを消費するだけではなく、課金したり、グッズを買って応援したいという、いわゆるファンになっていきました。

仕事に復帰し、子育てとの両立で自分の時間があまり取れなくても、寝かしつけが終わった夜中に少しだけ動画を見たり、通勤時間を使って情報収集したり、時間に制限があるからこそそのなかで集中して推し活をするのです。今年は、夫に子ども達を預けてコンサートに出かけることもできました。時間的に制限のある方が、より推せるような気もしています。

3. 子どもへの影響は

推し活が子どもの遊びにもつながっていくということも体験しています。わたしが

好きな曲を聞かせていたところ、今度は子ども達から「ダンスしたいから曲流して」と要望されたり、歌詞の一部を覚えて「○○(歌詞)ってかっこいいよね」などと話してくれることもあります。子どもの吸収力の高さに驚くとともに、親の好きなものを一緒に楽しんでくれる姿勢に感謝の気持ちも芽生えました。最近では、寝る前には子どものダンスタイム。わたしの好きな音楽を流して、子ども達と一緒に楽しんでいます。

この間での発見は、子育てと仕事との両立で時間的な制限がある方が、より感情は研ぎ澄ませられる、制限がある方が推せるタイプなのだという点にも気づきました。好きなことに費やす時間はとても充実していること、そして自分の好きな思いが誰かの応援にもつながっていくことを期待しています。子どもたちにも、そんな自分の好きを大事に育ててほしいなど心から思っています。

おわりに～推し活は応援活動～

子ども達には幸せに育ててほしい、それぞれの願いがかなってほしいというのは母親であるわたしの願いです。その感情は、推しには幸せになってほしい、推しの願いを叶えたいという気持ちとよく似ています。感情の強さや関与できる度合いには違いがありますが、気持ちとしては同じかもしれません。この気持ちはこのマガジンのテーマでもある「応援」と等しく同じ感情なのではないかと思います。ということは、応援とは一方的な活動ではなく、相互に願いや祈りが込められた活動なのです。